

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：34401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22592558

研究課題名(和文) 医療的ケアに携わる看護師の学校での活動基盤づくりと専門性を高める支援モデルの作成

研究課題名(英文) About the designing of a fundamental educational infrastructure at nursing schools, and a model support program designed to promote specialized knowledge.

研究代表者

泊 祐子 (TOMARI, Yuko)

大阪医科大学・看護学部・教授

研究者番号：60197910

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円、(間接経費) 1,020,000円

研究成果の概要(和文)：医療的ケアに携わる看護師の学校での活動基盤づくりのために看護実践能力を高める支援プログラムを作成することを目的とした。以下の3段階で行った。  
「看護実践力および医療的ケアに携わる困難等」の調査結果から侵襲性の高い技術に不安をもっていた。また【学校での看護の専門性】を發揮できない問題の1つに、教育の場における看護への理解不足があった。学校で4年以上勤務している看護師に半構造化面接を行い、「看護のアイデンティティを回復するプロセス」の終結は、[長い関わりで得た親や教員の信頼からの看護の醍醐味]であった。「重症度に応じた呼吸管理等技能訓練」を中心に支援プログラムを作成し、研修会を開催した。

研究成果の概要(英文)：The goal was to create an infrastructure for medical care instruction which would improve practical nursing knowledge and ability.

The plan was carried out using the following:

1) From the results of the study on "Issues Regarding Practical Nursing and Medical Care", a significant unease concerning rapidly-growing technologies was observed. One problem preventing the [application of specialized nursing knowledge learned at school] was that <the understanding of the nursing field gained in places of education was insufficient>. 2) A interview was conducted, querying faculty nurses who had been employed for 4 years or more. The result of the "Process to Re-discover the Spirit of Nursing" was the message that "The real reward of nursing is the trust earned from long, close relationships from parents and faculty". 3) A support program was created which focused on "Proficiency training in the use of severity-based respiratory care technology", and a hands-on training workshop was also held.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：学校看護 医療的ケア 看護師

## 1. 研究開始当初の背景

特別支援学校では、増加する医療的ケアの必要な子どもへの対応の課題に対して、文部科学省は厚生労働省の協力を得て、医療安全の確保が確実になるように実施体制の整備事業に平成17年度から特別支援学校に看護師を配置した。日本では、学校看護師は養護教諭へと独自の変遷を経た状況で、再度看護師が配置され、養護教諭と看護師の役割分担と協働連携方法の明確化が必須となった。

平成20年度都道府県の特別支援学校に812人の看護師が配置されているが、その雇用形態は大半が非常勤であり、学校での活動できる基盤づくりがまず必要と思われた。

## 2. 研究の目的

医療的ケアに携わる看護師の学校での活動基盤づくりができるために、専門性を発揮できる看護実践能力を高める支援プログラムを構築することである。

- 1) 医療的ケアにかかわる看護師の看護実践力を明らかにする。
- 2) 看護師の職務内容を明確にし、ケア実施上の困難、医療的ケアを担っての意見、重症児と保護者へのケアにあたっての課題を明確にする。
- 3) 特別支援学校で長く働く経験を重ねてきた看護師が、学校という場で行う看護のアイデンティティの揺らぎから回復するプロセスを明らかにする。
- 4) 看護師に必要な支援プログラムを検討する。

## 3. 研究の方法

- 1) 目的の1) 2) に関しては、東海・近畿地方にある特別支援学校113校の学校長宛に『医療的ケアに携わる看護師への調査』自記式アンケート用紙を郵送し、看護師への配布を依頼した。看護師からの返送を持って同意とした。

分析には統計解析ソフトSPSS16.0 for Windowsにて<sup>2</sup>検定、Fisherの直接法を用いた。自由記述は質的記述的に分析した。

- 2) 特別支援学校で5年以上医療的ケアに携わっている看護師10人に研究への同意を得て、半構成面接を行った。分析は質的帰納法を用いた。
- 3) 1) ~ 2) の結果を基に看護師に必要な支援プログラムを検討・作成し、研修会の開催を行った。

## 4. 研究成果

- 1) 『医療的ケアに携わる看護師への調査』の概要

調査票の返送は128通あり、回答者の平均年齢は43.8±9.04歳であった。最低23歳、最高は71歳であった。看護職平均経験年数は17.2±9.31年、うち学校での平均経験年数は3.5±2.65年であった。看護師として学校において医療的ケアに携わる以前に小児看護の実務経験者

は54.9%であり、そのうち、障がい児ケアに関わった経験者は53.6%であった。(以後、障がい児ケアの経験が有る人は「経験者」、無の人は「未経験者」とする)。雇用形態のうち常勤は8名(7.9%)であった。

(1) 医療的ケアに携わる看護師の看護実践力  
看護実践能力に関する医療的ケアに関する項目は、姿勢、呼吸、栄養、排泄、痙攣、導尿として日本小児看護学会発行(2008)の特別支援看護学校看護師のためのガイドラインを参考に独自に作成し4段階リッカート法で回答を求めた。

「できない」と回答した者が最も多かったのは、「口腔ネラトンチューブが挿入できる(28.4%)」であり、次が「自己導尿の確立に向けて子どもに方法や器具の管理を指導できる(22.5%)」であった。「できない」と回答した者がいなかった項目は、「胃内容物の正常・異常が判断できる」であった。

「一人で判断して自信をもってできる」と回答した者が最も多かったのは、「吸引物の正常・異常が判断できる(84.3%)」であり、次が「気管切開部または気管カニューレからの吸引ができる(83.3%)」であった。最も少なかったのは「正しく人工呼吸器が扱えることができる(25.5%)」であった。「一人で判断して自信をもってできる」と回答した者が30%以下であったその他の項目は、「腹圧が高く経鼻チューブが口腔へ上がりやすい子どもへの対処ができる(26.5%)」、「抗けいれん薬の使用の判断ができる(29.4%)」であった。

(2) 看護師からみた医療的ケアに携わっての困難および意見

64人分の自由記述115文節を分析した。その結果【異業種でチームを組む課題】【学校での看護の専門性】【医療的ケア充実のための体制整備】の3つのカテゴリ、10サブカテゴリから抽出された。

【異業種でチームを組む課題】は、医療者が看護師しかいない学校において、医療的ケアとして看護しなければならない状況の問題、これまでの医療職と異なる教育職とチームを組んで働く課題の内容であり、教育の場での戸惑い  
教育の場における看護師の役割の不明確さ  
子どもの症状・重症度に対する見方の違い  
関係をつくる難しさの4つのサブカテゴリで構成された。教育の場での戸惑いは、「学校と医療現場のギャップに悩んだ」「ケアのしかたを家庭の方法に合わせる」「対象児を常には見られない。観察ができない」「看護師が入れ替わっても引き継ぎのない現実」「保護者は看護師がいるので、(子どもの体調が悪くても)無理に登校させる」などであった。

【学校での看護の専門性】を発揮できない問題の1つに、教育の場における看護への理解不足があった。その内容には、「ケア対象児への判断を求められない」「看護技術の実施しか期待されない」などの教育職の看護

および看護技術への理解の不足があると推測される問題と、「医療知識をもつと教員が法律を超えてケアをしている。介護のカラーが強い」「保護者は看護師がいるので、(子どもの体調が悪くても)無理に登校させる」という介護と医療の境界の不明確さもみられた。

学校で看護の専門性を発揮できるためには、質の高い看護師の確保、雇用の待遇の問題の改善、医療的ケア充実のための体制整備の必要性が示唆された。

学校で看護師が活動する困難は、教育の場における看護師の役割の不明確さ、子どもの症状・重症度に対する見方の違い、看護教育の場における看護への理解の不足、や、看護師・教員・養護教諭の連携・協働に関する問題があがっていた。

(3)看護師の担任教諭・養護教諭および保護者等周囲の人との連携と、仕事への満足との関連

仕事内容に対する満足については、「満足(58.8%)」、「不満足群(41.2%)」であった。

「お互いの専門性を理解しあえている」、「学校内での医療的ケアへの理解が進み、働きやすい状況である」「医療的ケア担当教諭との連携が取りやすく、情報収集円滑でアセスメントしやすい」「担任教諭との連携が行いやすく、医療的ケアを実施しやすい」などの項目では、「満足群」「不満足群」との関連において有意水準1%で有意な差が認められた。

特別支援学校の看護師は、「学校内での医療的ケアへの理解が進み、働きやすい状況である」「養護教諭との連携は取りやすく、医療的ケアをする児童生徒の情報は円滑であり、アセスメントしやすい」「医療的ケアのある児童生徒を担当している教諭との連携が取りやすく、情報収集が円滑でアセスメントしやすい」「担当教諭との連携が行いやすく、医療的ケアを実施しやすい」といった項目について「当てはまる」とする回答が6割以上を占め、養護教諭や担任・医療的ケア担当教諭との良好な連携が行われていたが、医療的ケアを担う看護師の周囲の人との関係では、保護者や医師との直接的接触は行いにくく、看護師・養護教諭・教諭の三職種間での医療的ケア児の記録などの共有は十分な状況とはいえない状況であった。

看護師の仕事内容の満足についての関係では、「お互いの専門性を理解しあえている」、「学校内での医療的ケアへの理解が進み、働きやすい状況である」「担任教諭との連携が行いやすく、医療的ケアを実施しやすい」においては特に有意な差が認められた。

医療的ケアの実施に関する項目と、仕事への職務満足との関連性から、学校における看護師は医療的ケアを実施することで看護師としての役割を果たしていると感じ、さらには、看護師としての専門性が発揮できると認識され、仕事への満足に繋がっていると考える。また、限られた情報しか得ることのできない看護師にとって、教員など他職種と上手く連携することが、医療的ケアを安全に実施するには必要であり、円滑な連携から情報を得ることに職務満足と

の関連がみられた。

2)特別支援学校で勤務する看護師が看護のアイデンティティを回復するプロセス  
学校で4年以上の勤務経験がある看護師10人に面接し質的帰納的に分析した。

その結果、プロセスは[看護のアイデンティティが揺らぐ]も、[保護者と担任のチームに入る]などの主体的なケアへの変化から、[看護のアイデンティティを学校の中で見出す]ことで、[長い関わりで得た親や教員の信頼からの看護の醍醐味]を感じ、学校での看護を捉えるに至った。

そこで、看護師が学校での看護を理解していくには、学校での看護を支える教育や研修の必要性が示唆された。

3)医療的ケアに携わる看護師への支援プログラムの作成

(1)支援プログラムの作成

「看護師の研修」を教育委員会が主催実施しているのは33県であり、教育委員会と学校の両方で実施している県は12県、教育委員会・学校でも未実施である県が5県もあり(文部科学省 2010)看護師以外医療職のいない場所で勤務する看護師が職務への研さんを積む研修がない状況は、やはり優れた人材確保には困難であると思われる。

そこで、1)~2)の調査を基に、支援プログラムを検討した結果、

- 重症度に応じた呼吸管理等技能訓練を中心としたプログラム
- 経験している事例に関してのアセスメントや個別な相談などの事例検討
- 各学校での運営や学校内外での連携に関する課題を検討する交流を中心としたプログラム

が必要と思われた。これら3種のプログラムは、学校での勤務が初期の場合(ビギナーコース)と5年程度経験した場合(アドバンスドコース)の学校での経験別にプログラミングするとよいと考えられた。

(2)医療的ケア看護師研修会の実施

(1)のaプログラムについて、研修会を計画し、実施した。

本研修会は医療的ケアを担当する看護師が、重度障害児の特徴を踏まえて、個々の障がい児の個別性をアセスメントできる能力を高められることを目的とした。

呼吸機能を中心に重症心身障害児の特徴を踏まえたアセスメント及び援助方法の向上を目指した。

研修参加者の募集は、大阪府、滋賀県等の教育委員会特別支援学校担当者に連絡をして募集をかけた。募集人員は20人として、実技を丁寧に行えるように配慮した。

日時：2014年3月29日(土)10:30~15:00  
場所：大阪医科大学附属病院、医療技能シミュレーション室

## 【プログラム】

10:30～12:00 講義&演習

『重症児の呼吸機能のアセスメントと対応』  
(小児科医担当)

13:00～15:00 演習

『シミュレータを用いた重症児の呼吸 特別  
に気道のマネジメント』 (小児科医担当)  
少人数での演習とした。

15:00～15:30 まとめ 質疑応答

参加者は3県から21人参加し、終了後の評価  
アンケートでは、大変満足度は高く、次回の研  
修へも全員が参加を希望した。

今回は、1日のプログラミングをしたが、参  
加者は、技能訓練とともに、普段の疑問を話し  
合う機会も希望も出ていたので、2日間セット  
あるいは、2種類を別日程の積み重ねにするの  
かなどを検討する必要がある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には  
下線)

[雑誌論文](計4件)

古株ひろみ、津島ひろ江、泊祐子、特別支援  
学校で働く看護師が看護のアイデンティティを  
回復するプロセス、小児保健研究、査読有、第  
73巻2号、2014、284-292

泊祐子、竹村淳子、道重文子、古株ひろみ、  
谷口恵美子、医療的ケアを担う看護師が特別  
支援学校で活動する困難と課題、大阪医科大学  
看護学研究雑誌、査読有、第2巻、2012、40-50

道重文子、竹村淳子、古株ひろみ、谷口恵美  
子、泊祐子、特別支援学校において医療的ケア  
に携わる看護師の看護実践力、大阪医科大学  
看護学研究雑誌、査読有、第2巻、2012、51-59

古株ひろみ、泊祐子、竹村淳子、道重文子、  
谷口恵美子、医療的ケアを担う特別支援学校に  
勤務する看護師の他職種および保護者との連携  
と仕事満足との関連、人間看護学研究、査読有、  
第10巻、2012、59-65

[学会発表](計10件)

古株ひろみ、津島ひろ江、泊祐子、三徳和子、  
伊東美佐江、特別支援学校に勤務する看護師が  
経験から「学校という場での看護」を探しあて  
るプロセス、第33回日本看護科学学会学術集会  
(大阪) 2013.12.6-7

泊祐子、竹村淳子、古株ひろみ、道重文子、  
Necessity of creating an environment that  
enables nurses to carry out their medical  
care responsibilities effectively in  
special-needs schools in Japan、ICN 25th  
Quadrennial Congress (オーストラリア・メル  
ボルン) 2013.5.18-24

泊祐子、東美香、中井喜代美、神田真由美、  
松倉とよ美、医療的ケアを必要とする子どもの  
在宅療養を支える看護の力を引き出す - 病棟と  
看護外来の活動 -、日本家族看護学会第19回学  
術集会(東京)テーマセッション1、2012.9.8-10、  
p66-67

泊祐子、古株ひろみ、竹村淳子、特別支援学

校に勤務する看護師が医療的ケアを実施す  
る上で感じた問題、第22回日本小児看護学  
会学術集会(盛岡) 2012.7.21-22、p116

泊祐子、竹村淳子、古株ひろみ、道重文子、  
特別支援学校において医療的ケアを担う  
看護師の雇用形態により生じた問題とその  
対策、第38回日本看護研究学会学術集会(沖  
縄) 2012.7.7-8、p168

泊祐子、竹村淳子、古株ひろみ、道重文子、  
医療的ケアを担う特別支援学校に勤務する  
看護師の専門性に関する意識、第31回日本  
看護科学学会学術集会(高知) 2011.12.2-3、  
p510

泊祐子、竹村淳子、古株ひろみ、医療的ケ  
アを担う看護師の学校で活動する課題と希  
望、第58回日本小児保健協会学術集会(名  
古屋) 2011.9.1-3、p228

泊祐子、竹村淳子、道重文子、古株ひろみ、  
医療的ケアを担う特別支援学校看護師の児  
童生徒を取り巻く周囲の人々との関係の状  
況、第37回日本看護研究学会学術集会(横  
浜) 2011.8.7-8、p344

道重文子、竹村淳子、古株ひろみ、泊祐子、  
医療的ケアを担う特別支援学校看護師の  
看護実践力、第37回日本看護研究学会学術  
集会(横浜) 2011.8.7-8、p298

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

泊 祐子 (TOMARI Yuko)  
大阪医科大学・看護学部・教授  
研究者番号：60197910

### (2)研究分担者

竹村 淳子 (TAKEMURA Junko)  
大阪医科大学・看護学部・准教授  
研究者番号：00594269

(H24-25)

山地亜希 (YAMAJI Aki)  
大阪医科大学・看護学部・助教  
研究者番号：70637644

(H22-24年)

道重文子 (MICHISHIGE Fumiko)  
大阪医科大学・看護学部・教授  
研究者番号：00274267

### (3)連携研究者

古株ひろみ (KOKABU Hiromi)  
滋賀県立大学・人間看護学部・准教授  
研究者番号：80259390

(H22年)

谷口恵美子 (TANIGUCHI Emiko)  
岐阜県立看護大学・看護学部・准教授  
研究者番号：20320939

(H24-25)

津島ひろ江 (TSUSHIMA Hiroe)  
川崎医療福祉大学・医療福祉学部・教授  
研究者番号：80113364